

の三ばんとぎの白水しみづを入れて鹽梅あんばいして出すなり、是は鹽しほの加減かへんを以て肝要かんやうとすべし。

小き日記こきにっぎ (明治三十三年七月生男子)

(承前) 印東音鳴

明治卅四年一月二十二日。雪ゆきの中に兵士へいしの通るを見み(ブッブ)と踏ふみり上あがりて喜よろこぶ。

に菓子かしにても密柑みかんにても他所たしよより貰もらうて歸かへれば必ず姉あねさんに一ツひとつあげる、一ツひとつよりなき時も半分はんぶんかあげと言いへば(ポーン)と云いひ割わつてくれとて出です。
二十五日。姉あねさん(オッカア)と教おしへしに(オッカア)と云いふ、皆々みなみな大笑おほはらひ。

女學世界ぢやうがくせかいに束髮そくはつに結ゆひたる娘むすめの、小ちいさき男兒をとこのこの手てを引ひきてゆく圖づあり、是これを見みて拍手はくしゅをなし母ははにもせよとて母ははの手てを取とる、何故なにゆゑならんと考かんがへしに先まき

頃まじら此本の續ついできに女教師にょきょうしが三四人さんにんの男兒だんちと鬼おにごとを爲なし、一人ひとりが手てを拍うち居をる繪ゑありしを見みせたる事ことあり、其それ思おもひ出いせしならん。

二十六日。(あい)と初はじめて返辭へんじの言葉ことばを云いふ。

毎朝まいちやう早くより眼めをさまし(バーバオンマヒン)と云いふ。

母ははかき餅もちを切きり居ありに、側そばに來きたり三ツ四ツ縁側えんがはに持もち出だし(アカ)と呼よび投なげ出だす。

夜よるふとんを敷しくを見みれば直ただちに(ゴォオクンナー)と云いふ。

二十七日。鶏にはとりに菜なをやるを見みてコーコ(香物のと)と云いふ。

四五日にちまへ前まへよりヂーと云いひ出だす、爺ぢいやを呼よぶ積つりなり。

陶器たうきの犬いぬを持もち來きたり(アカボンポアブ)と云いふ。

二十八日。姉さんすねて唐紙にひつつき居りしに、其側に行き(オイデ〜)を爲す、姉さん動かず袖を引張り抱はたり種々にして連れ来り(アッタアコ〜)と唐紙を指さす。

二十九日。(カアー〜)烏(チュウ〜)雀を覺はる。

(オクンニヤア)と云ふ故どうぞ乳を頂戴と云ひと云ひしに(チ〜)と云ひ、お辭氣を爲しれて、を出す。

是より(チ〜)と云ふ、又此項より(アーピン)と云ひ新聞など持ち来る。

三十一日。姉さん齒痛しとて泣くを見(ネ、イタ、アー)と云ふ

二月一日。植木や来りしにお馬見に行くとして負はれる。

婆やと遊びころんで頭を打ち(イタイトーン)と云ひ母に頭を押へ見せに来る。

三日。姉さん縁側より落ちしを見て泣く、又母に叱られテーブルの下にすね居りしを抱きかへ機嫌をとる。

四日。人形を負ひ喇叭を持ち喜んで遊ぶ。

五日。朝爺や来りしに急ぎ人形の頭髮を持ち、縁側に引づり行き見せる。

一人にては抱き兼ねると見え、晝過ぎにも着物の裾を持ち逆に下げ居れり。

姉さんに大切の人形の顔を汚され泣く、姉さんおやまらず側よりしきりにれじぎを爲す。

此節は障子など獨りにてズン〜開ける。

八日。親戚の人来りしに(オト、〜)と云ひて鳥やの帳面持ち来る。

十五日。感冒にて醫師の診察をうく。

十六日。同前(イケナイ)として泣く。

二十一日。全快(イケナイヤイ、バカ、メー)「拇指を出す」など云ふ。

醫師の顔を見れば(イケナイ)と逃げ出す。

姉さん病氣にて寝て居るを見(ネ、ネンチ)と云ひ、

密柑など持ち來り顔をのぞき機嫌を取る。

二十二日、おかゆを食(カライ)と云ふ。

(イチ、アー)「一時君の泣きまね」と云ふ。

二十三日。近所の子供(あかや)と犬を呼び居るを聞き(アカ、コゾ)と云ふ。

薬瓶を持ち(オック)と云ふ。

眼さへ離せば鉢植の梅の書を取る。

二十四日。悪戯をしても叱らずに能々言ひ聞かせ

ば承知して(あい)と可愛らしき聲にて返辭を爲す

叱れば泣き出す。

炭を食(サマイ)と云ふ、其れは何かと問ひしに

(オンモ)と云ふ。

二十五日。足袋はだしにて台所より庭に出掛る。

二十七日。一時君の肩車に乗り、兩の耳を引張り

(ピン)と云ふ

